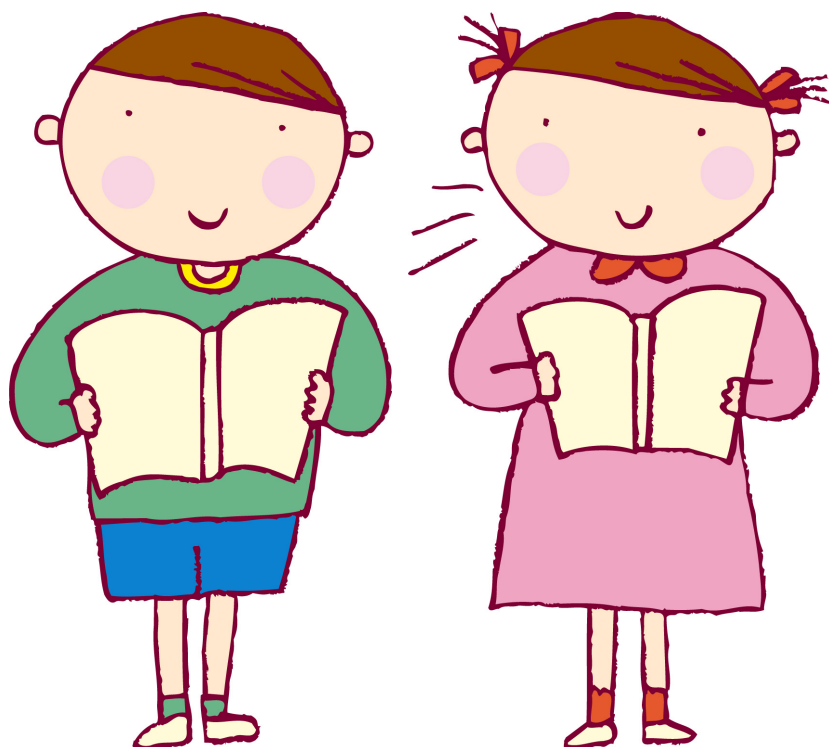


論理的
には

「国語は論理で解ける」
なんてことはありません

水島 酔



「学問に王道がある」などという迷信を糾す！

「国語は論理で解ける」というような内容の国語の問題集や参考書あるいは啓発本が、一部の人たちからそれなりの評価を受けているようです。私はその考え方に、正面切って反論しておきます。なぜならそれは国語力の本質から大きく逸脱^{いつだつ}しており、そういう考え方がかえって国語力の低い子供を作ってしまう危険があると考えるからです。

「国語は論理で解ける」という考え方について、賛成派も反対派も、その意味について**共通の理解がないと議論が成り立ちません**ので、まず、「国語は論理で解ける」という意味について整理しておきたいと思います。「国語は論理で解ける」派の人たちは当然「論理的」思考ができる方々のはずですので（笑）、整理の仕方も「論理的」にいきたいと思います。

仮に、「小学算数で解ける」というサブタイトルの算数の問題集があったとしましょう。「小学算数で解ける」と銘打^{めい}った場合、その中の問題は「**全て小学算数だけで解ける問題**」でなければなりません。「小学算数で解ける問題集」の中に、例えば二次方程式を使わなければならない問題がたった1つでもふくまれていれば、それは「小学算数で解ける問題集」という表題から外れていることとなります。表題に誤りがあったということです。

同様に、「国語は論理で解ける」という言葉の意味は、「**全ての**国語（の問題）は論理**だけ**で解ける」という意味になります。「国語は論理で解ける」と言いながら、「いや論理だけではなく、他の要素も必要ですよ」などという話になれば、「国語は論理で解ける」という銘の意味がなくなります。**どんな思考にもどんな学習にも「論理」は必要です**。「国語には『論理』も必要、『論理以外の要素』も必要」ということであれば、何のことはない、**至極当たり前**の話になってしまいます。「国語は論理で解ける」と大仰に銘打ったことは一体なんだったのか、という話です。

だから「国語は論理で解ける」＝「**全ての**国語（の問題）は論理**だけ**で解ける」という意味です。これはきちんと確認しておかなければなりません。そして、この共通の理解からスタートしない限り、「国語は論理で解ける」という宣伝文句も、論理で解ける派 vs 解けない派の議論も、どちらも成り立たないからです。

（※ 1：結論を言ってしまうと、結局「論理」を売りにしている問題集のほとんどは、**国語の一部分が論理的**であることを使って、**国語の一部分を論理的に**解く訓練をさせている、当たり前のことを当たり前にさせているだけのものである。またそのような問題集のいくつかは「論理」を謳^{うた}っているが、一部分でさえ論理的でない、論理的な解き方が全く明示されていないしろものである。）

(※2:「水島の言っている論理とは『形式論理』であって、国語は『非形式論理』だ」と主張する人もいる。しかし「非形式論理」においては「論理的」か「非論理的」かの明確な線引きはできない。非常に曖昧^{あいまい}なものである。そういう論理をもって、どういう考えが「論理的」で、どういう考えが「論理的でない」と判断するのか。

また仮に「非形式論理」が「論理」だと認めたにせよ、その論理の枠すら越えてしまう思考が、国語には必要である。後に「芸術性」のところでその一部分について述べる。)

さて、共通の理解ができたところで、「国語は論理で解ける」＝「**全ての**国語（の問題）は論理**だけ**で解ける」ということが誤りであることの証明をしていきましょう。

「全ての国語（の問題）は論理だけで解ける」のような「**全ての** pはqである」という形式の命題を「全称命題^{ぜんしょうめいだい}」と言います。

「全称命題」に対しての反論は、その反証を一つだけすれば宜しい。例えば「**全ての**カラスは黒い」という命題に対する反証は、「**ある1羽**のカラスは黒くない」という証拠を挙げれば十分です。要するにどこかで白いカラスを1羽捕まえば、これで「**全ての**カラスは黒い」という命題が誤っていたことの証明となります。「**ある1羽**のカラスは黒くない」というような「**ある特定の** pはqだ」という形式の命題を「特称命題^{とくしょうめいだい}」と言います。

「全称命題」に対しては「特称命題」の証明が反証となります。
（「特称命題」に対しては「全称命題」の証明が反証となります。）

「**全ての国語**（の問題）は論理だけで解ける」という「全称命題」に対しては、「**ある国語**（の問題）は論理だけでは解けない」という「特称命題」を反証として挙げればよいのです。

以前「国語は論理で解ける」ことを売りとした国語教材の説明会（販売促進展示会）に参加したことがあります。私は、国語は論理だけでは解けないのは当たり前だという認識でしたから、このような説明会に行く気はさらさらなかったのですが、義理もあって参加することになりました。乗り気ではなかったのですが、せっかく参加したのだから「国語は論理で解ける」と主張する人たちがどのような説明をなさるのか、その点には興味がありましたので、「国語は論理で解けるのだあ！！！」という、力強いが全く内容のない（笑）販促ビデオ鑑賞の後、直接教材を手に取りながらご担当者に尋ねてみました。

「この四択問題の答について、論理的に解説して頂けますか」
私は言いました。担当者の方は、「ここは『悲しい』という感情になりますから、答は『ウ』になります。」とおっしゃいました。

「答が『ウ』になる、というのは私も理解できます。その通りだと思います。先ほどビデオでのご説明があったように、国語は論理で解けるということです。私が伺いたいのは『ウ』という正答ではなく、**どうして正答が『ウ』になるのか**という点について、**論理的にご解説頂きたいのですが。**」

私の問いかけに対して、その担当の方はこう説明して下さいました。「『ア』と『イ』は、明らかに違います。ですから、答は『ウ』か『エ』かに絞られます。で、この登場人物は、この時『悲しい』と感じていますよね。ですから悔しい気持ちの『エ』ではなく、悲しい気持ちを表している『ウ』が正しいとなります。」

あまりにも論理的とは言いがたい返答に、私はどこから追求しようか一瞬躊躇^{ちゅうちょ}してしまいましたが、一つ問い返してみました。

「この人物が『悲しい』という気持ちを持っているという判断に至った思考の経路を、論理的に示して下さい。」

担当の方は「はい、それはですね、彼の気持ちは当然『悲しい』ですから、彼の行動が××になるのはお分かり頂けますよね」

「いえいえ、そうではなくて、私のお尋ねしているのは、ど

のようにして『悲しい』と判断したか、という点です」

「はい、ですから、ここで彼が『悲しい』となるのは当然ですよね、ですから彼の行動は…」

私の質問に対して、まともに答えられない。こりゃダメだ、と思いました。その後、いくら聞いても^{うち}埒があかないので、質問を変えました。「分かりました、それはとりあえず結構です。別の質問です。どうして『ア』と『イ』は明らかに違う、と言えるのですか。」

「はい、それはですね、明らかに『ア』と『イ』は違いますよね。ですから、残りの『ウ』か『エ』に絞られる訳です。」

「いや、だから、どうして『ア』と『イ』は明らかに違う、と言えるのですか、とお尋ねしているのです。」

「ですから、明らかに『ア』と『イ』は違いますよね？」

「違いますよね？」って。笑 もちろん違いますよ、そんなことは私は分かっていますって。先の質問と同じように、私が知りたいのは解答ではなく、その解答への「論理的」な筋道です。国語は論理で解けるという^{うた}謳い文句である以上、「論理的」な

解説する必要があります。私自身が解答がわからなかった訳ではありません。

「いえいえ、『ア』『イ』が明らかに間違っていることが分からないのではなく、どうして『ア』『イ』が間違っていると判断したか、その論理的思考の過程をお尋ねしているのです」

こういうやり取りを何度もくり返して、担当の方はやっと自分の論理が、どうも飛躍しているらしいことに気がつかれました。そして、自分ではそれ以上の論理的説明ができないので、上司とおぼしき方を呼んでいらっしゃいました。私は同じ質問をしました。

「私も正答は『ウ』だと判断します。そこで私がお尋ねしたいのは、どうして正答が『ウ』になるのかという点について、その正答への思考の論理的過程をご解説頂きたいのですが。」

上司の方がお答えになりました。「まず『ア』と『イ』は明らかに違っていますよね。ですから答は『ウ』か『エ』かのどちらかになります。」

「どうして『ア』と『イ』は明らかに違っていると判断したか、またどうして登場人物の感情が『悲しい』と判断したのか、論

理的な解法の手順を教えてください。」

「はい、『ア』『イ』は明らかに違いますよね。それでよろしいですね。」

「いやいや、だから、明らかに違うのは、私には分かります。私が知りたいのは、どうして『ア』『イ』は違っていると判断したか、その論理的な過程についてです。」

「いや…ですから…、どう見ても『ア』と『イ』は不正解ですよ。」

結局、先の方の返答と同じです。質問を変えました。「『ウ』『エ』のうち、どうして『ウ』を正解とするのですか。」

「はい、ここでの登場人物の感情は『悲しい』のですから、答は『エ』よりも『ウ』の方が適していると判断できます。」

「ちょっと待って下さい。どうしてそこは『悲しい』になるのですか。」

「それはですね、全体を通して読んでみますと、ここで彼が『悲しい』という気持ちを持つのはお分かりになりますよね。だか

ら…」

「いや、そこではなく、どうして彼が『悲しい』という気持ちになったと判断したか、その点について教えて頂きたいのですが…」

「ですから、彼が『悲しい』のは自明ですから、彼の行動が××に…」

結局、最初のご担当者と同じ返答です。論理的な解答への道筋は、一切明示されませんでした。

論理的には（笑）、これで終わりです。同じ設問について、論理的な説明のできる人が出てこない限り、これ以上何も必要ありません。

論理的にはこれで終わりです。「国語は論理（だけ）で解ける派」の人がもし論理的思考のできる人ならば、この私の主張に対してどう論理的に反論なさるのでしょうか。

「論理的に解答が導ける」ということは「答が^{いちぎてき}一義的に決まる（※3）」という意味です。算数（数学）はほぼ完全に論理的ですので、答えは一義的に決まります。（正確に言うと「答

が一義的に導けるように、公理系が定義づけられている」となります。※4 後述 P24) 人によって答が異なったり、日時によって答が変動したりすることはありません。

(※3:誰が解いても、いつ解いても、どこで解いても、答が一通りになる。)

しかし国語については、解く人によって答が異なることはしばしばあることです。答が異なるからと言って、どちらか（あるいは両方）が間違いであるとは言えません。算数（数学）の場合は、二人が異なった答を導いた場合、そのどちらか一方（あるいは両方）は間違っています。

国語には「解釈」というものが許されています。人によって解釈が異なる、受け取り方が違うということで、それが許されているということです。

過去に、ある入試の国語の読解問題で、ア～エの四択で答える設問があり、それに対してクレームをつけた人がいたそうです。クレームをつけた人は誰か。それは、その問題に出題された文章の作者です。作者^{いわ}曰く「私の意図するところは、ア～エのどれでもない！」 さあ、この設問に対する論理的な答はどれですか。この設問に対する論理的な解答の導き方などあるのでしょうか。作者の意図するものが正答ならば、この問題には

答えることができないし、出題者の意図するものを正答だとしても、それでも正答に導く論理的な手段などあるのでしょうか？

(※5：このような設問を「悪問」と分類し、解けない、解きにくい、あるいは複数の解答が考えられる問題が存在することに対する自己正当化をしている人がいる。本来「悪問」などという設問はない。論理的である算数(数学)の設問ならば、「正しい設問」か「誤った設問」かのいずれかで、答が人によって異なる「悪問」などという設問はない。そもそも、このような類の「悪問」が存在可能であることが、国語が論理では解けないことの傍証^{たぐい}となっていることも指摘しておく。)

文章(作品)は作者のものであるという考え方もできます。もしそうなら上の例の設問には選択肢に答がないこととなります。また文章(作品)は読者に委ね^{ゆだ}られているという考え方もあります。その場合、読者一人一人にその文章を解釈する権利が与えられているわけで、設問の正答(一義的に決まる答)などないことになってしまいます。

実は国語の問題作成には、この点が大きなディレンマ^{d i l e m m a}として存在し続けているのです。設問(テスト)を作成する以上、正答がなければいけません。算数(数学)ならば正答は一義的に決まります。しかし国語に一義的な正答など存在するのでしょうか。

高校生程度以下の「子供」に対する国語の問題は、「大人」なら誰が見ても「それは答えは『ア』でしょう」などと、おおよそ共通の理解ができるものを「正答」として、問題を作成することができます。

しかし、難関大学の入試問題など、「大人」でさえ解くのが難しい設問にしなければならない訳で、そのような設問の正答をどうするかというのは、非常に難しいことなのです。ですから、一般には大学の入試問題は、問題の文章をできるだけ難解なものにして、しかし正答あるいは正答への道筋は必ず文章中のどこかにあるように、文章中のどこかから読み取れるように設問を作成しなければなりません。そうでないと、先に述べましたような、作者が「私はそんな意図で文章を書いたのではない」というクレームが来る恐れが常につきまといます。

ですから、正答あるいは正答への道筋が必ず文章中のどこかにある大学入試の国語の読解問題は、いわば「間違い探し」みたいなもので、文章が速く正確に読めさえすれば、本当の国語力が少々低くても何とか正答を導きだせるように訓練することができます。高校生までにあまり国語力が高くないと思われていた生徒でも、訓練さえすれば、なんとか大学入試の国語が合格点をとれるようになる。私はそれは本当の国語力だとは思いませんし、事実、訓練で大学入試の国語の問題が（なんとか）

解けるようになった子が、でも中学入試レベルの問題を解かせるとやっぱり解けない、という事例はたくさんあります。

大学入試の問題は、難しいながら答が一義的に導けるような設問が多い、というのは事実です（※6）。ですから、国語の苦手な子供に、大学入試の国語対策に特化して「国語は論理で解ける」問題集をさせても、それなりに効果はでるでしょう。しかしそれはあくまでも「国語の苦手な子供」に対して「大学入試で得点する」という狭い目的を達成させるために特化した「方便」でしかありません。「とにかく、大学入試の国語の得点さえとれば良い」「国語力を本質的に伸ばすことなど希望しない」という方は、どうぞ「国語は論理で解ける」問題集をたくさん解いて、入試の得点だけ上げて頂ければ宜しい。これ以上、私の話におつきあい下さる必要はありません。そうでない方は、「国語は論理で解ける」問題集を解いたところで、**本質的な国語力は上がっていないのだ**ということは、しっかりご理解頂きたいと思います。

（※6：この点において、「国語は論理的に解ける」と錯覚している人がいることは、理解できる。）

ですから、元々国語力の高い子供に「国語は論理で解ける」問題集をさせても、何の意味もありません。時間の無駄です。

また、大学受験にまだ遠い高校1年生以下の子供にさせるのも、全く意味はありませんし、本文中から答を探すなどという悪いクセを付けてしまう恐れがあるので、**かえって国語力を落とす危険性もあります。**

国語力というのは本当に差が大きく、小学生でも大学入試の問題を解ける子もいますし、反対に高校生でも小学生の問題が解けない子もいます。わがエム・アクセスには国語力の高い生徒が多くいますが、「本当に」国語力の高い生徒もたくさんいました。「本当に」国語力の高い生徒は、小学生の時点で京大の文系の二次試験（現代文の読解のみ）を解かせると、だいたい60点ぐらいとります。試験が現代文だけなら合格できますね。

さらに「本当の本当に」国語力の高い生徒は、同じレベルの問題で70点以上とります。小学生が、京大の文系の二次試験問題で70点以上とるのですよ。これを「本当の国語力」というのです。「国語は論理で解ける」問題集で訓練して、中堅大学の国語でなんとか50点ぐらいをとる、というような「ニセの国語力」とは全く違います。

小中学生時にエム・アクセスに来てくれていた「本当の国語力」を持ったある子がいました。中学卒業時オール5（5段階

評価)の成績をとった子ですので、国語力のみならず他の教科も非常に良くできた子でした。そしてその子は志望校であるA高校の超難関B学科にみごと合格しました。

入学してしばらくしてのことです。久しぶりにその子がエム・アクセスの教室にやってきて、暗い顔で言うのです。「あんなあ先生、うちの学校の国語な、『C』なんて教材解かされるねん。もう最低やわ」

「C」というのは私が販促展示会に出席した、論理で解けることを売りにしている国語の問題集です。私は絶句しました。「え、それホンマ??？」超難関学科でありますから、当然国語力も高い生徒が集まっているはずですよ。それなのに、論理で解けることを謳^{うた}っておきながら実は論理では解けない「C」などという問題集をさせるとは…。同じ高校の中に、易しい学科のコースもあるので、そちらの生徒だけに使っているかと思いきや、全員させられるということでした。彼女が「最低やわ」という意味は、難しくて解けないから嫌だなどという意味では当然なく、そんなくだらないことに時間を取らされることが、たまらなく苦痛である、という意味です。

私には彼女の気持ちが大変よくわかりました。せっかく一所懸命勉強して、レベルの高い勉強を教えてもらえると楽しみに

して入学したのに、実際入学してみると「C」などというくだらない教材をさせられるとは。国語力のある方は彼女の気持ちに共感できると思います。彼女が「くだらない問題集をさせられること」に対して気分が落ち込んでいるのは、もちろんそれがくだらない問題集であることが理由でもあります。彼女の落ち込みの最大の要素は「期待に対する**学校側の裏切り**」ですね。こんな問題集をさせられるのならば、何もA高校のB科に入る必要はなかった訳です。A高校のB科の国語では、そんなことをさせているのか。私は暗澹^{あんたん}たる気分になされました。

先にも証明しましたように、国語が論理で解けるというのは誤りです。で、その「C」という問題集は表には「論理で解ける」ことを打ち出していますが、実際にはその問題集は、少し短めの「長文切り抜き問題 ※7」が単にどさっと大量に集められたものにすぎません。塾や予備校の国語の講師の中には、「読解問題は、とにかく問題をたくさんさせれば解けるようになるさ」という誤った考えを持っている人も、少なからずいます。おそらくその「C」という問題集も、本当のところは「とにかく問題をたくさん解かせる」という考えの^{もと}下からでてきたものにすぎないと、私は見えています。

(※7：長文切り抜き問題＝元は長い文章であるものの前後を省略し一部分を切り抜いて、国語の設問の題材にしたもの。水島が名付けた。

現在の国語力をはかる「テスト」としては有効であるが、これを解かせることで本当の国語力の向上にはつながらない。世の中にあるほとんどの国語読解の問題集がこの「長文切り抜き問題」である。ただ、私（水島）が「長文切り抜き問題」の欠点を指摘するようになって、徐々に「長文切り抜き問題」でない国語の問題集が増えてきている。「C」という国語教材も、初期はただの「長文切り抜き問題」であったのが、私がその欠点を指摘するようになって以降、元文章の全文を載せるようになった。呵々大笑。また、Dという個別学習も、最近になって「長文切り抜き問題」をやめたようだ。）

国語力には、文章の深い理解と「解釈」が必要であると、私は先に述べました。ところが国語の指導者であっても、文章の深い理解と、その解釈ができない人がいるのも事実です。また自分自身はそれらができる先生であっても、それを生徒に伝え導くのは、至難の業です。国語の指導は、非常に難しい。難しいから国語の先生は、いつも四苦八苦して悩んで苦しんで、その中から創意工夫をして、国語の授業をする。

「論理で解ける」というような教材は、その大変な仕事から先生を解放してくれるのですね。なぜなら生徒にそれを与えて解かせておけばよいだけだからです。「C」のような教材をポンと生徒に渡して、「はい、いついつまでに仕上げて持ってきてなさい」。丸投げですね。これは楽だわ（笑）。

「これさえすれば成果が上がる」というような教材は、先生にとって非常に魅力的です。しかしそんなものに頼ると、どんどん指導力が下がるのは、言うまでもありません。「C」のような教材は、先生にとって麻薬のようなものです。自分も楽し、生徒にとってもそれで効果が上がる（と錯覚する）。その時は魅力的に感じて、長い目で見れば、それは生徒の国語力にも悪い影響があるし、さらに先生の指導力さえも奪う。

もっと正直に話しましょうか。「C」のような「論理で解ける」ことをうたい文句にしている教材を使う先生は、元々国語の**指導力が低い**のです。端的に言えば、国語を教える能力が劣っている、のです。ちがいますか。自分の指導力のなさを、そういう教材でごまかしているだけなのでしょう。「C」のような教材を使用して、それでいて「私には高い指導力がある」「私は良い授業をしている」と仰る先生、もしいらっしゃったら、どうぞ私に反論して下さい。ご連絡下さい。私はいつでも受けて立ちます。お互い名前を名乗って公開の場で議論しましょう。

(※8:「銀の匙^{さじ}」という文学的文章を利用して、良い授業をなさったという灘中学校の橋本武先生の例をここで上げておく。橋本先生は、「長文切り抜き問題」で授業をなさったのか。否、絶対に否である。生徒によって、時間(時代)によって、その場の空気によって、橋本先生は、毎回ちがう授業をなさったのだろう。授業とは本来そういうものだが、特に国語の授業は生き物だからだ。)

私の率直な感想であるが、「銀の匙」という作品は、作品そのものにそう高い文学的価値のあるものではない。中程度の作品である。それに命を与えて生きた授業として活用なさったのは、橋本先生の力量であろう。これが本当の国語指導だ。だから橋本先生の授業は誰にもマネができないし、「銀の匙式国語」などと謳^{うた}って生徒を集めている進学塾もあるが、講師の力量がない限り、それは本物ではない。）

本当の国語指導とは、先生自身がまず教材として使用する文章をしっかりと読み込んで、深く理解して、解釈して、噛^かみ砕^{くだ}いて消化しなければなりません。そしてその自分なりの理解、解釈を生徒に説明するために、説明の方法、順序、板書の工夫などを考えて、そして授業に挑むことになるでしょう。本当に国語力のある先生は、その先生自身の解釈が必ずしも正しいものではないかも知れないということも分かっていらっしゃるし、授業の中で、生徒の意見を聞きながら、理解度をはかりながら、その場その場で最適の指導を工夫する。だから同じ文章を使っの指導でも、**同じ授業は二度とない**。生徒によって、時間によって、季節によって、様々な要素によって、授業は変わる。それが本当の授業です。授業とは生き物で、マニュアルで対応できるものではないのです。

「本当の本当に」国語力の高い子、小学生の時に京大の文系の二次試験の国語の問題で70数点とった、例の生徒の話をしましょう。

その生徒は中学入試の模擬テスト（国語）で、だいたい90点以上とっていました。ある回の時、100点をとりました。たとえ小学生向けの問題だとは言え、国語は大人でも満点を取るのが難しい科目です（このこと自体も、国語が一義的には解けない＝国語は論理では解けない、ことの傍証となっている）。

私は彼女の解答用紙を見ながら、ある問題の解答について気になったので、彼女に質問してみました。「あなたはどうして『××』という答を書いたの？」

それに対して彼女は、こう応えました。

「私はここの答えは『△△』だと思いました。作者はそういう意図で書いたと思います。でも出題者はおそらく『××』を答としていると思ったので、私は『××』と書きました」

これが「本当の本当の」国語力というものなのです。彼女は「作者の意図」を読み取った上で、さらにこのテストの「出題者の思考のクセ」を設問全体から読み取って、自分が正しいと思う答（彼女が「作者の意図」だと思ふ方）ではなく、正しいとは思っていない方の答（彼女が「出題者の思考」から導いた方）を書いたのです。

私は、その文章と設問を何度も何度も読み返して、その正答は「××」より「△△」の方がより適切だと判定しました。彼女の方が正しくて、模範解答を「××」とした模擬テスト業者の方が間違っている、という私の判断（※9）です。

（※9：国語の問題集や模擬テストには、このように「グレーゾーン」の模範解答が結構ある。さらに、明らかな間違いも珍しくない。私が設問作成者にその間違いを指摘し、後に訂正された事実も何度もある。国語のテストの採点は、こういう、算数などに比べればはるかにいい加減な状態でなされているのが実態である。それでも、国語の問題を論理的に解く方法があるのだろうか。）

「私もあなたと同じ、正答は『△△』だと思うよ。私なら答を『△△』と書くけどなあ」と私が笑いながら言うと、彼女は一瞬目を丸くして、すぐに少しはにかんだようすで目を伏せました。

この彼女の正答への導き方を「国語は論理で解ける」派の人たちは、どう「論理で」説明するのでしょうか。

「花子さんは涙を流しました」 ある物語文に、こういう1フレーズがあったとしましょう。この時の花子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。もちろん文章のその前後を読まなければ判断できませんが、「涙を流す」という描写から、「悲しい」「悔しい」「つらい」「びっくり」「うれしい」「痛い」など、多くの

感情なり感覚が想起されます。

またこれらの感情なり感覚は、普通一つだけではありません。これらの感情、感覚がいくつも複雑に混じり合っているのが、人間というものです。

「花子さんは涙を流しました」という一文で、本当に境目のない無数の感情、感覚が可能性としては存在します。さて、そのうち「花子さん」の感情、感覚はどれになるのでしょうか。

その時の花子さんの状況をどう理解するかによって、判断は変わってくるでしょう。その時の花子さんに共感できる人、できない人、花子さんのまわりにいた人に共感できる人、できない人。読者によって、様々な判断ができるはずです。その読者の判断は、読者自身の経験によって異なるでしょう。感性によっても変わってくるでしょう。男女差もあるに違いありません。同じ一文を読んでも、その人の経験や感性によって、読み取り方は異なるのが普通ですし、それが文学の良いところなのです。

文学とは芸術でもあります。芸術を解釈するのは、それを鑑賞する人に全て委ねられているのではないのでしょうか。どのような解釈をしても、それは鑑賞者の自由です。美しいと思うも醜いと思うも、面白いと思うもつまらないと思うも、それは鑑

賞者の自由です。

絵の評論をするとしましょう。絵の評論をするにあたり、一義的な解釈というものは存在するのでしょうか。しませんね。当たり前です。美術について一義的な解釈の方法が存在するなどと言ったら、呆れられるでしょう。一義的な解釈ができないということは、論理的な解釈ができないということです。

芸術に対して、論理的な解釈をすることは不可能です。文学も芸術であるとする、文学を論理的に解釈することは不可能だということになります。「論説文はどうか」という問いがあるかも知れませんが、論説文であっても芸術の要素は多分に含まれていますから、全てを論理的に解釈することは、やはり不可能でしょう。

数学は論理的です。一義的に解答が導けるものです。先に※3 (P11) のところで「(数学は) 答が一義的に導けるように、公理系が定義づけられている」と書きました。これについて、少しご説明しておきます。これは数学が論理で解けて、国語が論理で解けない一つの理由でもあるからです。

数学自体が根源的に論理的である訳ではありません。例えば「 $2 \times 5 = 10$ 」であるとき、「 $10 \div 2 = 5$ 」あるいは「 10

「 $\div 5 = 2$ 」が成り立ちます。しかしながら「 $a \times b = c$ 」であるとき、必ずしも「 $c \div a = b$ 」「 $c \div b = a$ 」が成り立つ訳ではありません。

「 $3 \times 0 = 0$ 」です。これは正しい式ですね。もし「 $a \times b = c$ 」であるとき必ず「 $c \div b = a$ 」が成り立つのであれば、「 $3 \times 0 = 0$ 」であるとき「 $0 \div 0 = 3$ 」が成り立つことになってしまいます。「 $4 \times 0 = 0$ 」も正しい式ですが、この場合「 $0 \div 0 = 4$ 」になります。いったい「 $0 \div 0$ 」の答えは何なのか。

「 $\square \div 0$ 」という式を考えた時に、四則計算のルールではどうしてもつじつまが合わないことが生じてしまいます。ですから仕方なしに「 $\square \div 0$ 」という計算はしてはいけないという特別のルールを定めたのです。

小学生で習う四則計算の範囲でも、どうしても一つのルールにはまりきらない現象が起きてしまいます。数学はこのような、ルールにはまりきらない状態を徹底して排除して、人工的に論理性が崩れないようにしているのです。ですから、数学は論理的であると言えるのです。それでも人間は完全ではありませんから、いつ矛盾や排中律はいちゅうりつ（※ 10）に反する事象が発見されるか分かりません。その時はその時で、新しいルールを加えて、できるだけ数学を完全な論理系に保とうとするのです。そうい

う暗黙の約束があるから、「数学は論理的である」と言って良いのです（※ 11）。

（※ 10 排中律：全ての命題は「A」か「not A」かに分類され、その中間は認めないとする考え。）

（※ 11 数学は論理的と言ってよい：ゲーデル Kurt Gödel の「不完全性定理」以降は、それも怪しい。数学が論理的であることの証明は、不可能とされている。）

また、論理系を形作るには、その系の範囲を明示する必要があります。幾何学を例にご説明しましょう。

幾何学には「直線」という概念があります。「直線」とは何でしょうか。「直線」とは「まっすぐな線」です。「まっすぐな線」とはどんな線でしょうか。「直線」のことですね。「直線」とはどんな線かと言うと「まっすぐな線」、では「まっすぐな線」はと聞くと「直線」と答が返ってくる。堂々巡りです。このような思考のことを「同義反復（トートロジー）」^{どうぎはんぷく}と言います。人間の思考は突き詰めてゆくと必ずトートロジーに陥りますから、それを回避しない限り、完璧な論理系を作ることは不可能なのです。「直線」を「2点間を結ぶ最短の線とその延長」と言っても良いのですが、トートロジーに陥ることについては同じです。^{おちい}

ですから幾何学においては「『直線』とは『まっすぐな線』なのだが、その説明は幾何学においては不可能だ。『まっすぐな線』で十分わかるだろう。だからそれ以上聞くな。」と規定してしまうのです。このように「これ以上問いつめてはいけません」という限界の取り決めを「公理」と言います。「公理」については「それは何なのだ」と質問することを禁止しているのです。こうしてトートロジーを回避しているのです。こうして、より^{かし}瑕疵（キズ）のない体系にしたものを「公理系」と言います。

国語は人間の生活に密着したもので、自然のものです。それに対して数学は人間が作った体系で、非常に人工的です。また数学は客体であり人間疎外（※ 12）です。数学はそういったものですから、論理的にしようと思えば、人間の能力の範囲内ながら、いくらでも、より論理的にしていけることができます（※ 13）。できるだけ完璧なものに近づけることが可能なのです。

（※ 12 人間疎外 Entfremdung：哲学、経済用語。人間が作ったものが人間の手を離れて、人間の意思とは無関係に独立に存在すること。）

（※ 13：数学も完全には論理的にあらず。いわんや国語をや。）

しかし国語は人の生活そのもの、生きることそのものですから、そう簡単に枠組みを決めたり、制約を加えたりすることは

できません。さらに国語で使うことのできる用語は日本語の全単語であり、それらは算数（数学）に使われる用語に比べて、はるかに膨大な量（※ 14）で、はるかに文脈依存的（※ 15）です。だから国語はどうしても「非論理的」にならざるを得ないので。それを「国語は論理で解けるのだ」と百万遍言われたところで、「いやそれは無理でしょう」と私は答えるのみです。

（※ 14：『大辞典』平凡社 には見出し語で70数万語収録されているそうだ。）

（※ 15：筆者によって、読者によって、文脈によって、ある一つの単語の意味がさまざまに変化する。）

人、特に現代日本人は、事を成すに何でも楽な方法があると思いつている嫌いがあると私は考えています。それを私は拙著「独断」（認知工学刊）で「ワンタッチポン」の思想として厳しく指摘しておきました。

養老孟司は「ああすればこうなる」という言葉で、また河合隼雄は「ふたつよいこと、さてないものよ」という言葉で、何でも思い通りに事が運ぶと思っている人間を、痛烈に批判しています。

特に人間相手である子育てや教育において、「こうすればう

まくいく裏技」などありません。やはり**学問に王道などない**のです。「国語は論理でとける」などと言われると、「ああ、国語力を高めるなにか特殊な、素晴らしい方法があるのだな」と錯覚させられますが、そんなことはないのです。

初めは論理的に、そしてその後は論理以外の様々な方向から、国語が論理だけでは解けないことを、私は示して参りました。なかなか言語化するの難しいのですが、この項のご説明で、本当の国語力とはどのようなものなのか、少しでもご理解が進み、少しでも子供さんの国語力向上のお役にたてば嬉しく思います。

論理的
には

「国語は論理で解ける」
なんてことはありません



水島 酔

平成24（2012）年10月初稿

平成26（2014）年6月補足修正

平成28（2016）年2月レイアウト修正